兵士たちが生きた時代

―日中戦争から太平洋戦争へ

横浜の兵士の記録

軍隊や戦争と無縁ではいられなかった時代、兵士たちはどのように生きたのだろうか。

横浜では、兵士の記録や資料が比較的少ない。戦前の横浜には、駐屯する連隊（当時は聯隊と表記したがここでは連隊とする）がなく、甲府連隊区に属していた。また、戦前に人口一〇〇万人を超えていた横浜の住民には寄留者も多く、地方出身者はそれぞれの本籍地に戻って出征していった。こうした都市横浜の事情が、横浜の兵士たちを見えにくくしている。

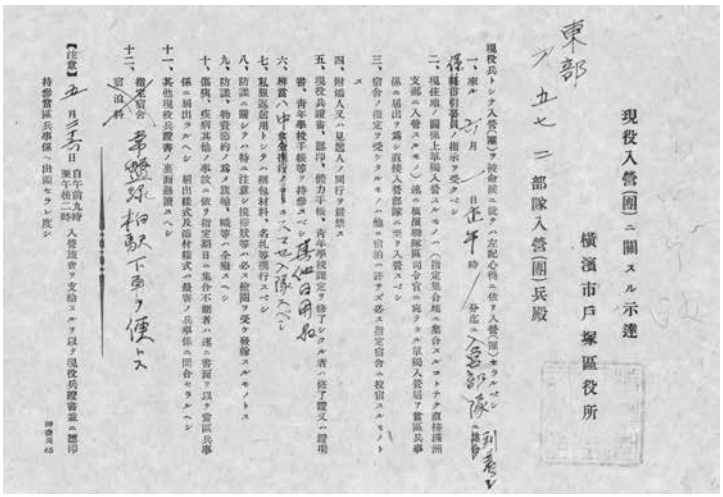
甲府連隊については、樋貝義治『戦記甲府連隊』（初版一九六四年、再版一九七八年、サンケイ新聞社）と『甲府聯隊写真集』（一九七八年、国書刊行会）が刊行されており、第四九連隊およびその後甲府で編成された各連隊の歩みが紹介されている。一方、横浜では郷土部隊が地元にないためか、部隊と兵士一人一人の歩みを残そうという動きが、鈍かったのも否定できない。

そんな中で、自らの軍事郵便をまとめた横浜の詩人松永浩介の『一兵士の戦中通信』（一九七八年、オリジン出版センター）は、貴重な存在である。

横浜市史資料室が所蔵する横浜の空襲と戦災関連資料などには、断片的ではあるが元兵士の関連資料や写真などが含まれている。また、体験記や手記も、いくつか提供されている。いずれも貴重な資料であり記録ではあるが、横浜における戦争体験を系統立てて再現するには不充分であった。

ところが、昨年の戦後七〇年をきっかけとして、元兵士の資料、とくに軍事郵便・従軍日誌や手記など兵士自身が記した資料が、新たに何件か寄せられた。その一部は、昨年の展示会や『市史通信』で紹介した。

今回さらに、ミニ展示「兵士たちが生きた時代」を開催し、展示した資料の中から、兵士一人一人の歩みを示す資料を紹介したい。まず、入営から帰還に至る間の公文書的な資料から見ていこう。


現役入營（團）ニ關スル示達

横濱市戸塚區役所

東部

第五七二部隊入營（團）兵殿

写真1　現役入営（団）ニ関スル示達　1945（昭和20）年5月
小糸光子家資料

入営に関しては、現役入営者に送られた通知「現役入営（団）ニ関スル示達」が残されている（写真1、小糸光子家資料）。宛先は戸塚町在住の小糸四郎さん。一九二五（大正一四）年生まれなので、一九四五（昭和二〇）年に徴兵検査を受けて現役入営することになったのだろう。陸軍の場合は入営といい、海軍の場合は最初に海兵団に入るため入団といった。小糸さんが入営する東部第五七二部隊とは、柏に司令部のあった陸軍第四航空教育隊のことである。

この通知は、戸塚区役所が入営日時や持ち物など細かな指示を記したもので、入営部隊の最寄り駅まで案内されている。入営の手順が、具体的によくわかる資料である。

軍隊手帳

軍隊手帳（当時は軍隊手牒と表記した）には、入営から除隊に至る軍歴が記録されている。配属先の部隊や派遣先、さらに簡閲点呼の記録なども記される。軍隊手帳の記載は、個々の軍歴を示すだけでなく、動員・召集、さらに戦地や部隊の動向など、軍隊の実情をよく反映する重要な資料といえよう。

たとえば、当時八幡町（南区）に住んでいた桐谷一さんの軍隊手帳を見てみよう（桐谷誠一家資料）。桐谷さんは千葉県出身で一九二一（大正一〇）生まれ、一九四三（昭和一八）年九月に臨時召集され、通信兵として東部第八八部隊（近衛電信第一連隊、現相模原市）に入隊した。間もなく満州に派遣されるが、翌年七月沖縄の部隊に転属して、徳之島の守備についた。一九四五年一月にはさらに宮古島に移り、そこで敗戦を迎え、復員した。

この軍隊手帳の記載からは、沖縄守備のために、満州から部隊や兵員が派遣され、島々に配置されていった様子がうかがえる。宮古島は、激しい艦砲射撃と空襲を受けて、兵士や市民に多くの犠牲を出したが、地上戦は行われなかった。

一方、召集が繰り返される実態も、軍隊手帳の軍歴から知ることができる。下倉田（戸塚区）の吉原朝次さんは一九〇五（明治三八）年生まれ、一九二六（大正一五）年一月、野戦重砲兵第三連隊（三島）に現役で入営し、翌年一一月に除隊した（吉原朝次家資料）。そして、一九三七（昭和一二）年の日中戦争開戦後に召集され、野戦重砲兵第一二連隊に編入された。一〇月に上海上陸直後、負傷して広島陸軍病院に入院し、翌年二月に召集解除となっているが、一九四一年七月に再び召集、野戦重砲兵第一三連隊に配属、満州に出征した。一九四三年一月に船舶通信連隊へ転属になった後、翌年一二月に広島で召集解除となった。

吉原さんは、日中戦争前にも二度の勤務演習に召集されており、一九三七年の召集時には三二歳であった。兵士としては比較的高齢の上、負傷して除隊となった後にも三六歳で再び召集された事実に、日中戦争時の動員の実情がうかがえる。現役兵中心の部隊を派遣せず、補充兵や予備役・後備役の兵士が多く動員されたのである。

軍隊手帳の軍歴には、参加した戦闘や作戦が、具体的に記入されていることもある。一九一四（大正三）年生まれの高橋虎之助さんは高部屋村（現伊勢原市）出身で、一九三八（昭和一三）年七月に甲府の第四九連隊留守隊に入営し、第三陸上輸卒隊に編入された（小川惠子家資料）。

同月中に上海に上陸、南京などを経て一一月には漢口に到着している。同年暮から翌年にかけて、南昌攻略戦や襄東（じょうとう）会戦に参加し、漢口周辺の警備に従事した後、一九四〇年三月に甲府に戻り、召集解除となった。そして、高橋さんの場合も一九四五年七月に再度召集され、甲府の東部第六三部隊（一九三九年以降の呼称）に入っている。

軍事郵便

これらの客観的な記録は、軍隊と戦争の実際を具体的に示している。一方、従軍日誌・軍事郵便など兵士自らが記した資料は、兵士一人一人の歩みに加えてその心情、とくに家族への思いを生々しく伝えてくれる。もちろん、軍の検閲のもと本音を記すには制約もあったが、文章の行間からその心情を読み取ることもできる。

安室吉弥家資料には、軍事郵便が葉書と手紙あわせて一〇〇通以上残されている。いずれも、桜岡小学校校長で青年学校長も兼ねていた安室晋治さん宛に、教え子たちが中国大陸の戦地から送った便りである。

「元気に軍務に服しております」といった決まり文句の近況報告が多いが、なかには敵弾を受けて負傷し、軍病院に入院・治療中であることを知らせる便りもある。また、戦地での移動の経緯や現地の様子、ある作戦・戦闘に参加した旨などが、検閲の許す範囲で記されていることも多い。少しでも自分の様子を、ふるさとの知人や家族に伝えたいという思いが伝わってくる。

広い中国大陸で、零下三〇度の厳寒と書く者もいれば、「暑熱猖獗を極め」と暑さを訴える者もいる。また、季節の移り変わりにふるさとへの郷愁を募らせる者も多かったようだ。定型の挨拶文のなかにも、異国の厳しい戦地に置かれた心情をうかがうことができる。

一方、家族宛の軍事郵便は、恩師や知人への近況報告に比べれば、家族を思う心情をより直接に表現している。

ルソン島で戦病死した田辺京三さんの葉書が、娘さんの手元にたった一枚残されていた（中野千鶴子家資料）。田辺さんは、一九一五（大正四）年埼玉県滑川生まれ、三菱重工横浜船渠（造船所）に務め、藤棚（西区）に住んでいた。家族の証言によれば、一九四四（昭和一九）年二月頃海軍に志願して砲兵となり、パラオ・ミンダナオ島・レイテ島を転戦した後、ルソン島でマラリアにかかって亡くなったという。

葉書は留守宅の妻千代子さん宛で、差出住所は海軍なので横須賀郵便局気付となっている。日付はないが、しばらく便りをしなかったこと、内地も暑いだろうといった文言から一九四四年の夏頃と思われる。

文面には、家族への思いがつまっている。「御前も色々と大変な事でせうが家の事は何分御願する。自分も御陰様で元気で居りますから、自分の事は少しも心配する事は無いから、御前もあまり躰は丈夫の方では無いから健康には呉々も注意されて、母上様や子供達を大切にして下さい。」と、妻に母親と子どものことを託している。

この葉書と共に、出征前に母と親子四人とで撮った最後の家族写真が残されている（写真2）。父に抱かれているのが、提供者の中野千鶴子さんである。

同じく、戦後、満州の軍病院で戦病死した田中国一郎さんの葉書には、子どもたちへの思いが溢れている（田中一郎家資料）。

田中さんは一九〇八（明治四一）年群馬県荒砥村（現前橋市）生まれ、平沼町から岡野町（西区）と、妻春子さんの両親と暮らしていた。一九四四年三月に召集されて高崎の東部第三八部隊（歩兵第一五連隊）に入隊、北支派遣軍の部隊に配属された（写真3）。翌年四月、夫の実家に疎開した家族に、北支からの便りが届く。「晃の病気の様子は其の後如何ですか。矢張り遠く離れて居ると何となく気になります。」と、子どもたちの身を案じている。

娘葉満子さんに宛てたこの頃の葉書が、一〇通残されている。長女である葉満子さんに対しては、仲良く遊んで

写真2　出征直前の田辺京三一家
1944（昭和19）年2月　中野千鶴子家資料

弟妹たちの面倒をよくみるように、「一番上の人は本当に骨が折れるのですよ」と、諭すような言葉が多い。他方、慣れない田舎での暮らしを案じ、「葉満子さんはもう六年生になられたのでしょう」と成長を喜び、「毎日何をして遊んで居られるか今度の便りに書いてください」と、子どもたちへの愛情に溢れた文面が続く。

しかし、やがて便りが途絶え、戦争が終わっても消息はわからなかった。妻春子さんは荒砥村で教員となり、夫の復員を待ったが、一年後の七月になって、戦争が終わった直後の八月二八日に満州の軍病院で戦病死していたことが、届いた死亡告知書によってわかった。その後、春子さんは教師として働きながら、子どもたちを育てた。その家族の歩みを、春子さん自身が「年輪の抄」と題する二冊のアルバムにまとめ、ここで紹介した軍事郵便や死亡告知書、写真などが貼付されている。

写真3　入営のため帰郷する田中国一郎と家族
1944（昭和19）年3月20日　田中一郎家資料

従軍日誌と従軍記

当時、兵士によって書かれた記録としては、軍事郵便の他に従軍日誌がある。中区若葉町に住んでいた中込達雄さんは、一九二三（大正一二）年生まれ、法政大学在学中の一九四四（昭和一九）年九月に学徒兵となり、千葉県二宮町（現船橋市）の東部軍教育隊に甲種幹部候補生として入隊した。教育隊では、訓練の一環で「修養録」に日々の反省を書くことを課され、教官が定期的にそれを点検した（中込達雄家資料）。突然、学生から兵士になり、兵士としての自覚を求められた葛藤がその文面からうかがえる。中込さんは演習中にけがをして、結局戦地に行くことはなかった。

これと対照的なのが、鈴木清蔵さんの従軍日誌である（鈴木彰家資料）。鈴木さんは、一九〇九（明治四二）年新潟生まれの医師で、一九三七（昭和一二）年九月に召集され、仙台の第四連隊に入営、見習医官として上海・南京へ出征した。翌年九月、負傷か病気か不明だが、大阪日赤病院に入院して、一二月に召集解除となった。しかし、一九四一年に再び召集、宮城県の東部第一一一部隊（第一二航空教育隊）に入隊、翌年少尉となる。一九四三年一〇月に満州吉林省に出征、翌年八月に、漢口陸軍病院で戦病死した。

従軍日誌は、この間に戦地で書かれたもので、ノートに細かい字でびっしり書き込まれている。その内容からは、残してきた妻や子どもたちへの思いと、軍隊という組織に様々な矛盾を感じ、さみしさと孤独を抱えた日々であったことが伝わってくる。上官の検閲を受けることなく、時々の心情を吐露する個人的な日誌として書かれたため、このように本音を正直に記すことができたのだろう。死後、戦友が遺品として家族に届けてくれたという。

一方、敗戦を戦地で迎えた兵士は、こうした従軍日誌などの処分を命じられた。マレーシアで敗戦を迎え、イギリス軍の捕虜となった金子清さんの場合もそうだった（写真4、金子清家資料）。捕虜となる前に、持っていた日記や写真をすべて焼却したという。

金子さんは、一九一〇（明治四三）年屏風浦村（現磯子区森町）の農家に生まれた。一九四四（昭和一九）年六月に召集され、東部第八部隊（近衛歩兵第七連隊）に入隊、八月南方軍の第一一六〇部隊に転属、一二月に仏印サンジャック（現ベトナムブンタウ）の独立混成歩兵第四三〇大隊に配属された。戦後、捕虜となってしばらく労役作業についていたが、一九四七年六月佐世保に上陸、ようやく復員を果たす。

写真4　入隊した頃の金子清
1944（昭和19）年8月　金子清家資料

一九六八（昭和四三）年頃になって、先に処分した従軍日記の再現作業を始め、「東南亜細亜官費旅行記」とあえて従軍記とは思えない題をつけ、「皇軍編」「終戦抑留編」「抑留復員編」の三編の手記にまとめた。すべて手書きで、罫紙三〇〇枚にも及ぼうかという大部なものである。しかも、戦地へ向かう輸送船団が敵の攻撃でほとんど全滅状態となり、自分の船も魚雷が命中したがかろうじて沈没を免れた経緯など、具体的に実に詳細に記されている。

また、現地の様子を描いた絵がときおりはさみこまれ、実家に残されていた軍事郵便や、何枚かの写真とあわせて手記の証言性を高めている。

金子さんの軍事郵便は、戦地に着い

てから捕虜となり、佐世保に上陸するまでのものが残されている。なかでも、捕虜収容所から送った軍事郵便は珍しい（写真5）。「被武装解除軍人郵便」と日本語と英語で表記され、さらに連合国軍の検閲マークであるCCDスタンプが押されている。これに対する父新太郎さんの返信も残されており、こちらにもCCDスタンプが押されている。清さんが持ち帰ったものだろう。

一人一人の戦争体験

通称暁部隊、陸軍船舶工兵部隊に所属していた岡正三さんは、戦争体験の手記と共に、上陸用舟艇などの絵を書いている（写真6、岡正三家資料）。写真と見比べても舟艇の特徴をよく捉えているが、何より大雨の日の水くみや、上陸作戦の様子など、当時の実際が実に生き生きと描かれている。

岡正三さんは島根県松江市出身、一九二二（大正一一）年八月生まれで、現在九三歳である。一九四三（昭和一八）年から三菱重工横浜造船所に務め、西区紅葉ヶ丘に間借り暮らしだった。

入営の詳細は定かではないが、一九四四年に福岡に集合して教練を受けた後、船で台湾に向かい台南市の安平（アンピン）にあった兵舎に入った。安平では「連日特訓を受け、地獄のような毎日」だったと手記に記している。さらに、幹部候補生としての特訓を別に受けたというから、入営してから志願したものだろう。安平では、上空で繰り広げられた空中戦も目撃している。

実戦には、ルソン島の北サンフェルナンド上陸作戦に参加した。時期ははっきりしないが、おそらく一九四四年暮から翌年初めにかけてと思われる。その際、元初年兵仲間に会い、「手を握りあって互に無事を祈って別れ」たという。そして、「上陸作戦は夜から朝迄、かなり明るくなって無事終了し」、台湾に戻った。ルソン島では、米軍が上陸した一九四五年一月から激戦が続き、多くの犠牲者を出した。一方、岡さんの部隊はその後新潟県沼垂に移動し、岡さん自身は作業中にけがをして新発田陸軍病院に入院、療養中に戦争が終わって帰還した。

写真6　陸軍上陸用舟艇のスケッチ　岡正三画　上が小発動艇（小発）、下が大発動艇（大発）、実際の上陸作戦では大発が主に使用された。

こうして兵士の記録を見てくると、一人一人の経験が実に様々であることがわかる。もちろん、農村部と違い地方出身者も多く、配属先の部隊が多彩であったという、都市横浜ならではの事情もある。他方、どの部隊、どんな戦地にいようが、兵士たちが家族のことを思う心情は皆同じであったろう。家族たちもまた、兵士の無事を祈り、復員を待ち望んでいたはずである。

今回紹介した九人の内、戦死した田辺さん・田中さん・鈴木さんはいずれも戦病死で、お子さんもいた。また、召集時に、三〇歳を超えていたのが三人、吉原さんは三二歳と三六歳の二度、田中さんは三六歳、金子さんは三四歳だった。鈴木さんも、二度目の召集は三二歳だった。日中戦争時に召集されたのは四人で、残りの五人は太平洋戦争が始まってからの召集であった。田中さんと金子さんの二人は、一九四四年に三〇歳台半ばで召集されており、戦況の悪化と共に動員がさらに強化されていったことがうかがえる。

これらはあくまで個別の事例ではあるが、こうした記録の積み重ねの先に、戦争の実像は浮かび上がってくる。軍隊や戦争と無縁では生きられなかった時代の、兵士たちの記録を残すことが、戦争を伝えていくことにつながる。兵士一人一人の記録や資料が、大切な理由がそこにある。

（羽田博昭）

写真5　マレーシアペラ州のイギリス軍捕虜収容所からの軍事郵便　1946（昭和21）年9月7日　金子清家資料